

今年の開花は寒波の影響で遅れるのではとの心配をよそに、大阪城公園の梅林は今が見ごろ。「今度こそ」春はもうすぐそこまで。現在会員登録数2,886人さま。次号は3月20日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》読書活動ボランティアのためのワンポイント 102

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■ ----- ■
【1】お知らせ

● 「日産 童話と絵本のグランプリ」受賞作品原画展

当財団主催「第34回 日産 童話と絵本のグランプリ」(平成29年度実施)の入賞作品の原画展を開催しています。

日 時：開催中～3月10日(日) *ただし、国際児童文学館の開館日時

場 所：大阪府立中央図書館 国際児童文学館(東大阪市荒本)

入場料：無料

3月上旬に予定している第35回(平成30年度実施)グランプリの発表後は、新しい入賞作品の原画に展示替えします。(～3月24日(日)まで)

詳細は→ http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Masayo's Talk

『ジュリアが糸をつむいだ日』リンダ・スー・パーク/作 ないとうふみこ/
訳 徳間書店 2018年12月 対象年齢：小学校高学年以上

あらすじ：韓国系のアメリカ人で7年生のジュリアは、楽農クラブの自由研究を近所に住む親友パトリックと行うことになり、お母さんに勧められてカイコを飼うことにするが、実は、あまりに「韓国ふうすぎる」と思って乗り気ではなかった。そのことを言い出せないまま、準備が進む。しかし、いざ、研究が始まると、夢中になる。そして、カイコから取り出した絹糸で韓国伝統の刺繍を成果物として発表することにする。その過程で、パトリックの悩み、母の偏見に気づき、弟との関係も変化していく。

Y：韓国系アメリカ人2世のジュリアがカイコを飼い、糸を紡ぎ、刺繍をすることで、自分のルーツを受け入れる様子がユーモラスに描かれていました。

M：ジュリアはパトリックにこの研究をしたくないとなかなか言い出せず、実はパトリックもそんなに研究に乗り気ではなかったということがわかるというどんでん返しがおもしろかったです。

Y：カイコを飼うために、黒人のディクソンさんに庭の桑の葉をもらいに行くことになりましたが、ジュリアの母は、ディクソンさんのことを警戒していることが感じられます。マイノリティどうしの偏見というテーマも興味深く読みました。

M：この作品では、そうした偏見について、ジュリアと母や、ジュリアとパトリックが論議するというような突き詰め方はされていません。そういう母親の態度をジュリアは「ほんとうのところはわからない。でも、少なくとも、わからないということはわかっている。」(p.245)と書いているように、事実を把握し、一緒に生きていける状況を探るという現実的な対処法を選択しているところに、物足りなさを感じながらも説得力があるとも思いました。

Y：そういう意味で、カイコを飼うことや、パトリックや母親や弟に対するジュリアの揺れ動く気持ちが丁寧に描かれている点がおもしろかったです。

M：何でも邪魔してジュリアから邪険にされている弟がカイコの世話を手伝うことによってジュリアと心を通わせ、ジュリアが集めているコインをプレゼントするようになるところはいいなと思いました。

Y：原題は「Project Mulberry」(「Mulberry」は桑の意)です。

M：このタイトルからは、カイコが桑の葉を食べ、糞をして、それがまた木を育てるという循環を思い起こすと同時に、人と人とのつながりの輪を感じさせます。そして、マユから蛾が飛び立つように、ジュリアの成長を読み取ることもできると思いました。

* 今回のゲストは愛知淑徳大学教授の酒井晶代(M)さんです。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第42回「セロ弾きのゴーシュ」

「トロメライ」と「印度の虎狩」

前々回、前回の「猫の事務所」(当メルマガ NO.100、101)の「猫」からの連想で、今回は、「セロ弾きのゴーシュ」です。

金星音楽団の楽長に「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」とどなられたゴーシュは、夜おそく、「何か巨きな黒いもの」をしょって、町はずれの川ばたの、こわれ

た水車小屋に帰ってきます。それが彼の家でした。

ゴーシュは、いきなりコップでバケツの水をぐくぐく飲むと、セロをぐうぐうと弾きはじめます。そこに、最初にたずねてきたのが、おみやげのトマトをもった、大きな三毛猫でした。――「わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

〈「何をひけと。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭いて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思ったかまずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎっしりつめました。それからまるで嵐のような勢で「印度の虎狩」という譜を弾きはじめました。〉

三毛猫は、ロベルト・シューマンをしゃれて、こう呼びますが、まさにロマンチックな「トロメライ」と「印度の虎狩」が際立った対比を見せる場面です。「トロメライ」は、もとはピアノ曲です。

「チェロに限らず闇雲に大きく速く弾こうとしたら上達しないというのは器楽演奏の鉄則である。ゴーシュが三毛猫の所望する「トロイメライ」を弾くことが出来ないのもこのためだ。ゴーシュに最もふさわしい音楽は《嵐のような勢》《怒った象のような勢》で弾く「印度の虎狩」のようなく勢いに任せる音楽、他者との対話のなかに息づく喜びやエロスの音楽ではなく、モノローグとしての〈怒り〉の音楽なのだ。」と評するのは坪井秀人です（「セロ弾きのゴーシュ」2003年）。それでも、ゴーシュは、物語のなかで、ぐうぐうぐうぐう弾きつづけ、第六交響曲の演奏会のアンコールでも「印度の虎狩」を弾くことになります。この愚直さを「デクノボー」というのでしょうか。（馬車別当）

（本文の引用は、角川文庫版『セロ弾きのゴーシュ』によりました。）

《3》 読書活動ボランティアのためのワンポイント 102

その11 さまざまなご質問にお答えします（20）おはなしについて4

質問：昔話を語る時、書かれている言葉をそのまま覚える必要がありますか。

（前回のつづきです）

前回は、知らない言葉をどうするかについて「なら梨とり」の「ふくべ」という言葉をどうするかについて、考えました。今回は、この点についてもう少しだけ補足させていただきたいと思います。

前回、幼い子どもには「ふくべ」の代わりに「ひょうたん」と言い換える可能性について書き、「ひょうたん」もわからない子が多いということも書きました。では、なぜ、「ひょうたん」と言い換えるのかというと、たとえ、「ひょうたん」が何か知らなくても、その言葉を聞いたことのある子どもは「ふくべ」より多いのではないかと思ったのです。語りは語り手と聞き手とのコミュニケーションなので、誰も知らない言葉を語ったときと、聞いたことが

ある子どもが一人でもいる言葉を語ったときでは、場の雰囲気が変わります。

とはいえ、松岡享子著『語る人の質問にこたえて』（レクチャーブックス お話入門6 東京子ども図書館 2011年10月）に、「子どもの知らないことばはいいかえたり、説明したりしたほうが？」という質問があり、松岡さんは「生まれてきた子には、わかっていることはひとつもなく、すべてはわからないことです。一中略—ですから、子どもはわからないことに出くわすことを、けっしていやがっても恐れてもいません。」と述べ、「思い切ってそのまま話してみたらどうでしょう。」と助言されています。そして、それは新しい語彙に会う機会でもあるとおっしゃっています。このことは私自身もとても大切に、肝に銘じなければいけないと思っていることです。

ですので、もし、おそらく子どもが知らない言葉で、それがおはなしの中でそれほど大切にできなかったり、類推できたりするときは、そのまま語りますし、知らなくても聞いたことがある子どもがいそうならば、そのまま語り、聞かれたら、その場の状況に応じて、その時、または、終わった後で説明することにしています。

おはなしは、語り始めたら生き物ですのでその場の状況に応じますが、場に出る前には、どうすれば語る相手の子どもに届くのか、一語一語を大切に考える必要があると思っています。

* 次号も引き続き同じ質問について考えます。ぜひ、ご質問やご意見をお待ちしております。(Y)

《4》 行って来ました！

美術館「えき」KYOTOで、3月4日まで開催されている「長くつ下のピッピの世界展 リンドグレーンが描く北欧の暮らしと子どもたち」に行ってきました。

この展覧会では、スウェーデン王立図書館所蔵の『長くつ下のピッピ』等の貴重な原画をはじめ、リンドグレーン作品の原画、リンドグレーンの速記で書かれた原稿ノートや、オリジナル原稿、愛用品など約200点が、「1. 長くつ下のピッピ」、「2. アストリッド・リンドグレーン」、「3. アストリッド・リンドグレーンの生んだ小さなヒーロー&ヒロインたち」の大きく3つに分けて展示されています。

『長くつ下のピッピ』は、もともと娘に語った即興のお話なのだそうです。リンドグレーンが自分でタイプし、イラストも描いて、娘の10歳の誕生日に贈った手づくりの本がありました。表紙に描かれたピッピの姿は、耳の横に突き出たみつあみに、赤と黒の左右が違う色の靴下をはいています。日本でよく知られている桜井誠の描いたピッピはこのピッピに少し似ているように思いました。

また、『長くつ下のピッピ』のコーナーには、イングリッド・ヴァン・ニイマンの挿絵の原画がたくさん展示されていました。場面ごとにストーリーが紹介されていて、ピッピのいたずらっぽい表情や登場人物たちのユーモラスな動きが楽しめます。雑誌で連載されたマンガ版のピッピの原画には訳がつけ

られていて、トミーとアニカが隣の家に引っ越ししてきたピッピと出会うエピソードや、ピッピの家に泥棒が入るエピソードなど、絵でストーリーを追う楽しさがあります。

リンドグレーンの他の作品の挿絵を多数手がけたイロン・ヴィークランドの原画もたくさん展示されていました。『やかまし村の子どもたち』や『ちいさいロッタちゃん』など、違う画家が描くと、リンドグレーンの世界がこんなにも違うのかと驚きながらも、それぞれの画家の解釈を味わうことができ、興味深かったです。(K)

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介
■ ----- ■

●箕面はぐるま研 国語科研究会

講演「教室は分からなくてはいけないところ？

ーわからないことがその後の世界を楽しくするー」

講師：清水真砂子（児童文学者、翻訳家）

日時：3月2日（土）午後1時～3時30分

午前10時～12時 実践報告

会場：箕面文化・交流センター 大会議室（箕面市箕面）

参加費：有料

申込み：必要

主催：箕面はぐるま研

後援：箕面市教育委員会

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント
■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『ジュリアが糸をつむいだ日』を1名の方にプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ N0.102 プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は3月11日(月)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — | — |

里帰り出産のために娘とともにわが家にいる2歳半の孫。パパの代りにじいじが鬼役。お面だけをつけているので正体はバレバレだと思いきや、「じいじ、鬼にならないー！」と、「変身」しているものだと信じきっている。豆をぶつけつつも泣き顔の孫。早々にもとのじいじに戻り、抱っこ。この一年、みんな健康で暮らせますように。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

- このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。
- 配信の登録・解除・変更は、
http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ
- このメールの送信アドレスは配信専用です。
- 記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
